

目白三平

二足のワラジのすすめ

中村武志



時事通信社

目白三平

二足のワラジのすすめ

中村武志



時事通信社

目次三平 二足のワラジのすすめ

初版発行 昭和五十四年二月二十五日
二刷発行 昭和五十四年三月一日

定 価 九八〇円

著 者 中村武志

発行者 立花丈平

発行所 株式会社時事通信社

東京都千代田区目比谷公園一―三
電話 〇三三九二二二一（大代表）
振替 東京 四一八五〇〇〇

印刷所 株式会社太平印刷社

©1979, TAKESHI NAKAMURA

0093- — -3199

落丁、乱丁はお取り替えます。

サラリーマン諸氏 “二足のワラジ” をおすすめする

目白三平は、私の半身であり、ここに書かれることは、ほとんど作者の経験であって、フィクションの部分は少ない。そこで私自身のことを書く。

国鉄に就職した際、将来二足のワラジを穿くことになるとは思ってもおよばなかった。ましてもの書き志望なぞ毛頭ない私が、社内報の編集を機縁にして、いや応なしにもの書きがはじまった時の困惑と狼狽は大きかった。

その時、私は決心した。ほんの素人が、運に恵まれただけで、もの書きになったのだから、現在どんなに売れても、本職の国鉄職員を辞めるべきではない。どんなに苦しくても、定年まで勤めることにしようと考えた。二足のワラジを穿きだしても、絶対に本職をおろそかにしてはならない。“目白三平も”が、売れば売れるだけ、一層国鉄の仕事に精を出した。上役、同僚、後輩にたいしても、謙虚を旨として接した。

私の幼少年時代の部分をお読み下されば、おわかりと思うが、祖父と両親のきびしいシツケや教育の

おかげで、いわゆる根性のごときものが、私の身についていたことはたしかである。それが二足のワラジを穿くにあたって役だったにはちがいないが、それほど重要なことではない。

本職にたいしてはいうまでもないが、内職にも、真剣に取り組むこと。同時に、本職の国鉄職員としてのサラリーは少ないが、内職の書き収入のほうが多いから、本職のほうは、クビにならない程度にうまく誤魔化しておいて、もの書きのほうに精力を注ぐというようなケチな考えは持たないこと。

本職を怠けていては、自然にヒケメを感じることになり、内職のほうもうまいことになる。たとえ、内職が御法度でも、露見した時、上役が文句がいえないほど本職に努力すること。

公私ともに、充実し、緊張した時間を過ごしたい。二足のワラジを穿いているのだから、酒や麻雀その他の遊びを止めて、ただ励みに励んでも効果はあがらない。そんなケチな考えは捨てて、遊ぶべき時には、大いに楽しむがいい。

『寄らば大樹の陰』というような安易で、気楽な人頼み、会社への依頼心は捨てて、もしあなたの会社が小樹ならば、これを大樹に育てる気概をあなたに持っていただきたい。

会社はとくに多角経営時代にはいつている。倒産が相次ぐからいうのではないが、今後はサラリーマンも多角経営で行くべきである。社会的に経済機構が変わり、仕事が細分化されたために、好むと好まざるとにかかわらず、生きて行くためには、サラリーマンも多角的な活動が要求されている。それゆえ、二足のワラジを穿くことに、ヒケメを感じたり、遠慮したり、卑下したり、自嘲したりすべきではない。それはあなた自身の生き甲斐であり、また社会的必然が生んだ現代的現象だと考えて、堂々と実

行していただきたい。

この現代的現象に應えて、自分の一生の中で、たった一つではなく、ほかに何ができるかと、積極的
にあなたの可能性を追求して貰いたいののである。誰でも二足のワラジは穿ける。穿けるか、穿けないか
は、やる気があるか無いかのちがいに過ぎない。苦勞は多いが、同時にそれは、喜びにもつながるので
ある。

なお、この本は、『週刊時事』に連載した小説「どっこい！目白三平は生きている」（自昭和五三年一
月七日号至七月八日号）を纏めて「二足のワラジのすすめ」と改題したものである。

中 村 武 志

目白三平 二足のワラジのすすめ 目次

サラリーマン諸氏 “二足のワラジ” をおすすめる

隠居にシツケられる 2

機関車同士の別れ 13

就職早々クビになる 23

出世はエリートにまかせる 33

まぶたを熱くする 44

新年会でセミになる 53

黒い前掛けを作らせる 64

編集権を奪われる 75

百閒先生の序文をいただく 85

著者は叱られる 95

不義理の追加払いをする 105

もの書きはつらいよ 115

原稿紛失で売りだす 125

見合いの栗饅頭を食べる 134

日曜作家は悲しい 144

国鉄職員全部を先生にする 154

訓示しても膨脹する 165

ホテルへ逃亡する 175

ホテルでつまみ洗いをする 185

出版記念会に行く 195

総裁に訓示を垂れる 206

紙上演「二足のワラジのすすめ」 216

男性だけが人間である 216

掃除・洗濯は何でもない 219

皆さまにお願いする 222

亭主は王様である 226

亭主は長生きさせるべし 232

博徒は斯道の先覚者である 235

二足時代の到来 243

挿画 頼田室子

装丁 阪田 啓

目白三平 二足のワラジのすすめ

隠居にシツケられる

満五歳から論語を読まされる

幼年時代、少年時代の目白三平は、特に祖父からきびしく育てられた。父親は小学校の教員で、後になつては、中学校の教師になつたから、実家から通うことができる近い学校勤め以外は、家にいなかった。だから彼は、幼、少年時代の大部分を、祖父母と暮らしたのである。

今から考えても、この祖父はケツタイな百姓であつた。作男と女中さんを一人ずつ雇つていて、自家用の米、野菜を作らせ、その上養蚕もやっていた。他の田畑は全部人に貸していた。

祖父は、朝から四書五経を読み、午後になると、近所の老人を相手にして碁を打っていた。村の名譽職をいくつか引き受けていて、その寄り合いに時々出かけて行くだけであつた。

大正三年一月十五日、満五歳になつた日の朝のことを、目白三平は今でも忘れられない。朝食が済むと、彼は、祖父の前に端坐して、その日から、四書五経の素読をさせられることになつたのである。

素読は、論語からはじめられた。今はそんな読み方はしないが、「子曰く」ではなく、「子曰く」であ

った。

子曰く「^{しのたまわ}学びて時にこれを習う、また説^{よろこ}ばしからずや。朋^{とも}有り、遠方より来たる、また樂しからずや。人知らずして^{いまだお}慍^いらず、また君子ならずや」と。

カイゼル髭を生やした祖父は、音吐朗々と全部を暗誦してから、次に、短く区切つて、目白三平に読ませる。もちろん意味は皆目わからぬのだから、その都度間違えたり、つかえたりする。同じ間違いを何回犯しても、祖父は少しも怒らない。悠々として、同じ章句を繰り返して教えるのであった。

三十分間の素読を終えると、続いて三十分は習字をさせられた。小さな手に、墨をたっぷり含ませた太い筆を持たせられた。目白三平は、子どもながらにヤケクソになつて、墨のほうにまで、墨を飛ばせて、なんとも得体の知れない絵とも字ともわからぬものを書きなぐつた。祖父は、筆勢が雄渾かつ氣宇宏大だといつて、珍しく褒^ほめてくれた。

素読がはじめられてから、十分とたたぬうちから、すでに目白三平の足はしびれだしていた。読み方を間違えても文句はいわない祖父は、足をもじもじさせたり、膝を崩したりすると、たちまち五歳の幼児を遠慮なく一喝した。習字が終わつた一時間後には、もはや兩足の感覚がなく、立ちあがれなかつた。彼は仰向けにひっくりかえつて、いつまでも足を揉んでいた。

早生まれの目白三平は、大正四年満六歳で片丘南小学校へ入学した。今も痩せているが、子どものころは、一層チビであつた。

そのチビ小学一年生に、祖父は今度は農作業の特訓をしたのである。松本の鍛^か冶^じ屋に特別注文して、

子ども用の小さな鍬、鋤、鎌、鉋、鋸など農具一揃えを作らせた。

目白三平が小学校から帰るのを、祖父は今やおそしと待ち構えていた。祖父は、彼に鍬や鋤を持たせ、その日のスケジュールにしたがって、ある日は田圃に、次の日は畑というように出かけて行き、その使い方を一時間もかかってみっちりと教えるのであった。馴れないと鍬や鋤で自分の足を傷つけることがある。だから、振りあげる高さ、振り下ろす時の角度などを煩いほど繰り返し指導する。畝の作り方、畝と畝の間隔も教えられた。

山林から伐りだして来た雑木を、一定の長さに鋸で挽くのだが、非力の小学生には、容易なことではなかった。冬を迎えるまでに、目白三平が作る薪のノルマはきまっていたが、大晦日までに達成されることは少なかった。馴れるにしたがって、年々その量がふえて行ったからだ。

田圃の蛭を養う

夏休みになると、大きな麦藁帽子をかぶり、毎日災天下の田圃へ行き、田の草取りをさせられた。これもつらい仕事の一つであった。

それよりも気味が悪く不愉快なのは、足に蛭が吸いついて血を吸うことであつた。誰でも大人は、手で払い落とすしながら、作業を進めるのであつたが、少年目白三平はいささか変わっていた。いちいち払い落とすのも面倒だから、いっそのこと蛭を養つてやろうではないか、と彼は考えたのである。血で満腹になると、自然に蛭はぼとりと落ちるのであつた。

蚕に食べさせる桑の葉は、水気が禁物であり、かつ新鮮でなければならぬ。雨もようの日は、夜中に起きて天候を調べる。今にも降りそうだとすると、家族全員が起こされる。遊び疲れてぐっすり眠りこんでいる、小学一年生の目白三平も例外ではない。猫の手も借りたいのであって、雨の降らぬうちに、桑の葉は一つかみでも多く摘まねばならないのだ。

午前二時、祖父が目白三平の布団をひっぺがす。そんなことで眼をさますものではない。すると彼は、きまつて目白三平の小さなお尻を蹴っ飛ばすのであった。

背丈ほどもある大きな籠をしよわされた目白三平は、三百メートルはなれた桑畑へ向かつて、半睡半醒のまま走り続ける。

桑の葉は、一枚一枚摘んでいたのでは、なかなかほかどらない。枝をつかんで、上から下へ手でしごくのである。これを何回も繰り返していると、やわらかい子どもの手はたちまち傷つく、畑から帰ると、祖母がお袋さんが、手を消毒し、赤チンを塗ってくれるのであった。

食物の好き嫌いやも許されなかった。嫌いだなどというものなら、そのお菜が、祖父の命令で、目白三平だけ三日でも四日でも続く。祖母もお袋さんも逆らえぬことを知っているから、命令のままにしたがうのであった。

近所のどこの家庭よりも粗衣、粗食であった。すべてのものを大事にし、節約のかぎりを尽くした。

朝、昼は、味噌汁と漬け物とつくだ煮というようなもので、夕食にはせいぜい塩鮭、干鰯、鰯、秋刀魚などがつくだけであった。たまに出る鯉や鮎の甘露煮、鰻のかばやき、鶏料理、オムレツ、馬肉鍋な

どはご馳走の部類であつた。

小学生の目白三平は、その日のお腹の空き加減で、箸を取る前に、今夜は御飯を二杯食べたいと思う。あるいは三杯にしようと思える。そこで彼は、お膳（だん）の上の魚や料理を、あらかじめ半分、あるいは三等分にする。といつても箸で千切つておくわけではない。眼で見当をつけておくのだ。お菜の半分で、あるいは三分の一で御飯を一杯食べる。とにかく、御飯とお菜を同時に食べ終わるようにしたものだ。お菜の量は同じでも、目白三平は、御飯を四杯でも五杯でも食べることができた。いつでも彼は、御飯に合わせてお菜を食べ進むようにしていた。

このようにして成長した目白三平は、現在でも、スキヤキなどの場合、まずあるだけの肉を食べられるだけ食べて、後でお茶づけを軽く一杯というような食べ方は、何だか勿体ない気がしてならない。そこで、ついはじめからあるスキヤキで御飯を食べ終えるから、肉が残ってしまう。そして、後でしまつたと思うのである。

余談はさておき、少年目白三平の生活は、近所の子どもたちとちがつて、常に家事優先であつた。学校の復習をしていても、宿題に夢中になつていても、祖父は遠慮会釈なく、目白三平を使い走りにこき使つた。二キロ先の塩尻駅前の商店へ、毎日のように買い物に行かされた。

「もう少しで宿題が済みますから、その後で……」

などといおうものなら、

「ウツテガエシ（口返答）をいうつもりか」

と、祖父に怒鳴られ、素直にしたがわないと、なぐられたものである。

少年目白三平は、祖父をおそれ、ひそかに憎み、怨んでいた。なぜこんなに虐待するのか、と不思議に思うことさえあった。彼は、心の中では、祖父を「クソ隠居」と呼んでいた。

目白三平が中学生になるにおよんで、祖父の態度はがらりと変わってしまった。家庭における子どものシツケ、教育ということにはいっさい触れることがなくなった。目白三平が責任を持つ家事の分担は、きまっていたから、それさえ怠けなければ、祖父は何一つ指示、命令することがなかった。まったくの自由放任主義に変更されたといってもよかった。

それどころか「ものは相談だが……」というのが祖父の口癖で、目白三平を対等に扱い、時々大人の相談を持ちかけられるのには彼も閉口した。

この時になって、漸く目白三平は、祖父の意図が読めたのであった。家庭のシツケ、教育は、幼、少年期に徹底的にする。昔は、十一歳から十六歳の間に、元服―成人式―をして、庶民は前髪を剃ったのだから、すでに中学生の目白三平は立派な大人である。もはや孫の目白三平は独立して生活すべきだ、というのが祖父の考えであることは間違いなかった。

祖父をクソ隠居と怒鳴る

目白三平は一度だけ祖父を「クソ隠居」と怒鳴り散らしたことがある。大正十三年、中学三年生の時だ。その年は、異常な干魃^{かんばつ}で、米も野菜類もたいへんな不作であった。